雪景画の考察からみた雪見の対象となる風景の構成手法

埴 生 雅 章*

The Method of Composing the Objects for Snow-watching
through a Study of Snow-scape Pictures

Masaaki HANYŪ

摘要：雪見の対象となる雪景としては、雪のある所とない所の相互関連により生じる『対比』が雪景操作の観点からも重要であり、その視点から、雪の絵で評価の高い『広重』の雪景画を対象とし、雪景における『対比』の効果的な表現手法を分析の上、その特質を考察した。その結果、積雪の大地や物を白く覆い、風景を統一する効果、物を部分的に覆い、風景に変化と統一を与える効果、統一された雪の領域の出現によって、雪に覆われない領域等との明瞭な対比関係が生ずる効果、および降雪の背景との色彩対比等により印象的に見える効果等が多用されている傾向が確認され、雪見対象の構成原則確立のための手掛りが得られた。

1. はじめに

富山県では都市公園の冬期利用の新分野開拓をねらいに、『雪美のひろば・スノーアートとやま』が1990年より開始されている。この企画は、自然に降り積もる雪の姿・形に一定の範囲で人為的な操作を加え、そこに出現する雪景の美しさを楽しむという発想にもとづくものであり、いわば「現代の雪見の庭」を都市の中に創出しようとする試みであるといえる。今後も継続的に実施し、手法・技術の蓄積を行っていくこととしているが、一方で『雪見環境の形成に関する基礎的研究』を平行して進める必要がある。その研究分野としては、第1には『雪景のイメージ』に関するものがある。雪見の対象となる雪の風景とは何か、どのような雪が美しく印象深いものとなるのかといった、「雪景イメージ」の研究である。日本の伝統文化（文学、絵画、造園等）に見られる雪景イメージのほか、現代人の雪景イメージを探ることも課題となる。第2に『雪の形』に関するものがある。雪見の対象となり得る雪の形とその操作に関する研究であり、平地部の富山の都市公園において観察可能な範囲での雪の形が問題となる。様々な雪の形を出現させるための操作方法や雪見対象の構成手法の開発が課題となる。第3は雪見の場全体をどのように構成するか、用意すべき場の内容、具体的な構成方法など、『雪見環境形成』の手法に関するものである。雪見の場の全体的な環境構成や演出手法など空間的な事項が中心であるが、雪見の場にふさわしい催事など時間的構成も問題となる。

以上の3つの分野は相互に関連するが、本論は第2の観点から、第1の雪景イメージを日本の伝統文化として

の絵画の中に探ろうとする試みの一つとして位置づけられ、特に江戸後期の浮世絵師『広重』の雪景画をとりあげ、その雪景イメージの特質を考察することにより雪見対象の構成の手掛かりを得ようとするものである。

2. 研究の対象について

(1) 雪景画に着目する理由

研究対象として雪が描かれた絵（雪景画）に着目する理由は、まず、絵と実際の風景という違いはあっても、「描かれた雪景」には「眺めて楽しめる雪景」の特質が含まれていると考えられ、雪景画の構成手法を探ることにより、雪見対象構成の原則に関する手掛かりが得られるであろうと推測するためである。次に、雪は「雪月花」と並び称され、日本人の伝統的な美意識に深くかかわる景物であったことから、雪の絵が数多く描かれてきた歴史があることである。すなわち、大和絵においては「雪は四時の景観の雄をなすものであり、且亦景物に乏しい冬季の美をひとりで代表するものとして、雪の絵は最もよく畫かれた」¹⁾とされ、江戸期に至り、大和絵の伝統に加え、様々な絵画の要素を取り入れて成立したとされる浮世絵の場合も「雪月花の眺めは古来最も好まれた画材であり、ことに雪の絵は浮世絵には多くの佳作をのこしている」²⁾とされている。

(2) 広重の雪景画を選定する理由

次に、研究対象として雪の絵の中でも『広重』の雪景画に限定するのは、「広重は、月、雨、雪の作がすぐれているといわれるが、雪の絵が最も多い」²⁾との指摘があること、今日の浮世絵研究の原点とされる小島烏水の

*富山県土木部都市計画課

『浮世繪と風景畫』³⁾では、広重を「霧と雨と雪の美術家」と呼び、数多くの浮世絵師の中でも広重の雪景画に高い評価が与えられているためである。また、研究方法設定の前提として、江戸と現代の風景の構成要素の差異、雪の少ない江戸と豪雪地富山の差異はあるものの、楽しめる雪景の基本的な特性については相当の共通項があると考えられている。

3. 分析の前提について

広重の雪景画の分析は以下のような前提（視点と方針）によりおこなうこととする。

(1) 分析の視点「雪の統合と対比の効果」

一般に、雪には物を白く覆い風景を単純化する働きがある。描かれた雪景も同様な特性を持ち、「雪のふり積った風景は全くことになった感触となる。色を否定して、白一色にし（中略）、雪に単純化される」⁴⁾といわれる。一方、雪の風景単純化の働きは、逆にものの色や形を際立たせる効果を持っており、小島烏水は広重の雪景画には「朱と白の対照、又は濃藍と雪白の対照は、広重の雪景に、好んで用ゆる」特色があることを指摘⁵⁾している。前者は風景に対する雪の「統合効果」、後者は雪の「対比効果」といえる。筆者も、雪見対象の構成にあたっては、雪のあるところとないところの関係が重要であると考えている。⁶⁾ 実際に広重の代表的な雪景画を概観すると、この雪の統合効果による白く単純な部分と、これに対する色鮮やかな部分の対比効果が画面構成にとって重要な働きをしていることが確認できる。以上のことから、本論ではこの雪の統合と対比の効果に着目して分析を進めることとする。

(2) 分析の方針「雪景画の構成内容区分」

①雪の様相「降雪と積雪」 雪景画（降雪・積雪のいずれか、あるいはその両方が描かれている絵）は、降雪の有無と積雪の有無によって区分される。しかし、広重の雪景画の場合、降雪・積雪の内容や程度をさらに細かく区分することは困難であり（降雪の程度については、2段階「降りしきる、降る」に区分は可能と見られるが、積雪の程度については、小雪とみられるものがほとんどで、また大雪と小雪、小雪と薄雪等の区分の判定も困難）、降雪・積雪を細分する方向での分析は避けることとする。

②雪以外の構成要素 降積雪以外の画面の構成要素としては、広重の雪景画の概観により「木竹、大地、水辺」のほか「建物、工作物、動物、人物、その他」があることが知られる。これらの要素の占める場ごとにどのような雪景が出現し、それらが画面に対してどのような統合・対比効果をもたらしているかを知ることが重要と考える。

③雪および雪以外のものの色調「無彩色と有彩色」 広重の雪景画の色調は、全体に白色および灰・黒色を主体

に画面を構成するいわゆるモノトーン調のものから、白雪の中に、青・赤・黄、緑など色彩感豊かなものを配し、雪との鮮やかな対比をなすものまで変化に富んでいる。白灰黒を無彩色、その他の色を有彩色として区分し、これらがどのような統合・対比効果を生んでいるかを分析することが必要である。

④対象との距離「特に近接景」 広重の後期の作品（特に「名所江戸百景」の連作等）には、ごく近接する対象を大きく描き、中景・遠景との対比をなす特異な構図が見られる。雪景画でこのような構成のものは、極めて強い対比効果を画面にもたらすこととなる。このため近接景の有無は統合対比の効果の分析にとって重要な区分となる。（分析に当たっての繁雑さを避けるため、近接景以外の遠・中・近景の区分や構成についてはここでは考慮せず平等に扱うこととする。また、このことに関連し、画面の構成要素の大きさも考慮しないこととした。）

⑤景の重なり「前景と背景」 雪景における前景と背景の関係は統合・対比効果を左右する。空や水面を背景とした降雪などは鮮やかな対比を見せる。このため、雪景における前後の重なり方とその効果を確認することも重要である。

4. 分析方法

(1) 分析項目

以上の前提のもとづき、広重の主要な雪景画を観察し分析に入ることとするが、具体的には、次の方法によっておこなう。

①構成要素の区分 画面の構成要素に関してすでに述べたように、雪の様相については「降雪」と「積雪」に二分し、雪景の重なる点から、「降雪」については空を背景とする部分「降雪イ」と、水面など空以外のものを背景とする部分「降雪ロ」に区分する。また、雪が降り積もる場や物体等の種類により、「木竹、大地、水辺、建物、工作物、動物、人物、その他」に区分し、特に、「水辺」については水面を「水辺イ」、水上にある物を「水辺ロ」に、「建物」については屋根を「建物イ」、壁や窓などの垂直面を「建物ロ」に細分し、雪と雪以外のものを合わせ全体で12の構成要素を設定した。

②効果の内容区分 次に雪の統合・対比効果の判定に関しては、筆者個人による観察という方法に伴う恣意的判断を可能な限り避けるため、次のような判別基準を設けた。まず画面を全体としてとらえ、大地を覆った雪面など、一面に雪のあるところ（「全雪領域」という）で白色に表現され画面全体に統合の効果（「（白色）統合効果」という）を生じている部分、灰黒色の樹木など雪のないところ（「無雪領域」という）や陰影が表現されている雪面など無彩色に表現され画面の基調をなす雪白に対し対比の効果（「無彩色対比効果」という）を生じ

積雪の領域とその効果
(積雪のみの場合)

降雪の領域とその効果
(降雪と降雪がある場合)

注: 領域と効果を結ぶ太線は画面全体に対する効果を、細線は各領域内での効果を示す。
また、*は全雪領域が白雪面の場合を、**は暗雪面がある場合を示す。

図-1 雪の領域とその統合・対比効果

図-2 雪の領域区分

図-3 広重の『江戸名所御茶の水』の雪景分析

ている部分、雪中の朱色の建物など無雪領域で色鮮やかに表現され、画面の雪白に対比対比の効果(「有彩色対比効果」という)を生じている部分を画面の構成要素別に観察する。さらに画面の一定範囲を限定して見たときに雪のあるところとないところが混在することが観察される部分(「斑雪領域」という)については、その無雪領域の色調により、無彩色対比効果と有彩色対比効果があるが、画面全体に対しては統合効果も果たしていると思われることができるため、それぞれ無彩色対比効果と統合効果、有彩色対比効果と統合効果の双方の効果があると判定することとする。以上のことを模式的に図示したものが図-1であり、図-2には雪の領域の区分を整理した。また図-3に広重の雪景画をこの方法により分析した例を示した。

(2) 分析対象

分析に使用した文献は広重に関する8冊の画集^{6)~12)}であり、この中から分析対象とする雪景画として抽出した作品は43点である。

5. 分析の結果と考察

(1) 分析結果の整理

分析の結果、各画に観察できる構成要素別の統合・対比効果については、表-1のようにまとめられる。この表は縦軸に構成要素、横軸に各画の画題を置き整理したものである。大きくは降雪景の有無と程度、水面景の有無によって区分し配列した。この表は各画の構成要素と統合・対比効果の関係について視覚的にも判別しやすいよう工夫したが、各要素と効果の全体的な関連を見やすくするため、表-2に、量的な集計をまとめた。この表は、全体としてどのような効果がどの構成要素との関連で生じているかの頻度を示すものである。観察された各要素と効果の組み合わせ、[要素-効果]の組の数(述べて出現度数)は367であり、重要度1以上の[要素-効果]の組は29種類であった。この29種類が広重が雪景画を描くときに用いた主要な技法といえるであろう。表-2を作成したのは、本論のねらいからして、楽しめる雪景の一般的な構成原則を探るためには、個々の作品の特

表－1 雪景画の分類と内容

凡例：○白色統合効果 ●無彩色対比効果主体 ○双方の効果あり ○表現なし
 ・微小（判定難）◆有彩色対比効果主体 ○双方の効果あり ◆<◇近接景
 画集略号：Ⅰ（原色）⁹¹ Ⅱ（大系）⁷¹ Ⅲ（八景）⁸¹ Ⅳ（東海）⁹¹
 Ⅴ（木曾）¹⁰¹ Ⅵ（隅田川）¹¹¹ Ⅶ（江戸）¹²¹ Ⅷ（広重）¹³¹

番 号	画 題	降 雪	積 雪	雪
		Ⅰ 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12		
		降降雪大水水建建 工動人	そ	
		集雪雪 辺辺物物 作 の		
		イロ竹地イロイロ 物物物 他		
	▽降雪景なし			
	□水面景なし			
1	東郡名所 吉原雪の朝	Ⅴ	○	◆空（背・赤）雲型
2	東海道五十三次 龜山雪晴	Ⅰ	○	◆空（背・赤）
3	行書東海道 江尻	Ⅳ	○	◆空（背・赤）
4	木曾海道六十九次 和田	Ⅳ	○	◆空（背・赤）
5	古今浄瑠璃尽姫小松田遊鳥物語	Ⅰ	○	◆空（濃灰）
	■水面景あり			
6	江戸高名会亭尽洲崎初日之出	Ⅴ	○	◆初日、空（背）
7	江戸名所三つの桃日本橋雪晴	Ⅴ	○	○富士山
8	江戸名所 日本橋雪晴の朝	Ⅴ	○	◆空（背・赤）○富士山
9	新撰江戸名所 日本橋雪晴図	Ⅱ	○	○山（赤）
10	近江八景 比良暮雪	Ⅱ	○	○山
11	東郡名所 外桜田弁慶桜の井	Ⅴ	○	◆空（赤）
12	鎌倉東海道 程ヶ谷	Ⅳ	○	◆空（濃灰）
13	東郡名所 隅田川全図雪中景	Ⅳ	○	◆雲型（赤・緑）
14	東郡名所隅田川雪見之図	Ⅰ	○	◆空
15	清盛怪異を見る図	Ⅶ	○	◆空（月光）
	▽降雪景あり（降りしきる雪）			
	□水面景なし			
16	東郡名所 浅草金龍山の市	Ⅶ	○	○雪の傘の大群
	■水面景あり			
17	四季江戸名所 冬 隅田川之雪	Ⅶ	○	○常緑樹と雪
18	名所雪月花 井の頭池弁財天社	Ⅶ	○	○水上の群衆と雪
19	表裏駅路八景箱根山中湖水之図	Ⅶ	○	○

番 号	画 題	降 雪	積 雪	雪
		Ⅰ 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12		
		降降雪大水水建建 工動人	そ	
		集雪雪 辺辺物物 作 の		
		イロ竹地イロイロ 物物物 他		
	▽降雪景あり			
	□水面景なし			
20	鎌倉東海道 鶴子	Ⅰ	○	○雪上足跡
21	東海道五十三次蒲原夜之雪	Ⅱ	○	○雪上足跡
22	江戸近郊八景飛鳥山暮雪	Ⅴ	○	○雪上足跡
23	行書東海道 石薬師	Ⅰ	○	○雪上足跡
24	木曾海道六拾九次 大井	Ⅰ	○	○雪上足跡
25	東郡名所 芝増上寺雪中之図	Ⅴ	○	○雪上足跡
26	江戸名所三つの桃芝増上寺雪中	Ⅴ	○	○雪上足跡
27	東郡名所之内 祇園社雪中	Ⅴ	○	○雪上足跡
28	名所江戸百景 浅草金龍山	Ⅱ	○	◆近接景＝門、提燈
	■水面景あり			
29	木曾路之山川	Ⅱ	○	○雪上足跡
30	日本漫遊 相州蒲賀	Ⅱ	○	○雪上足跡
31	東郡八景 両国暮雪	Ⅴ	○	○雪上足跡
32	東郡名所隅田川八景 三囲暮雪	Ⅴ	○	○雪上足跡
33	名所江戸百景目黒太鼓橋夕日図	Ⅴ	○	○雪上足跡
34	東郡司馬八景 愛宕山暮雪	Ⅴ	○	○雪の傘の群
35	東郡名所 亀戸天満宮境内雪	Ⅴ	○	○雪中梅花
36	富士川上流の雪景	Ⅶ	○	○雪上足跡
37	東郡名所芝赤羽根之雪	Ⅴ	○	○雪上足跡
38	江戸名所 外桜田弁慶堀	Ⅴ	○	◆雲型（黄・紫）
39	名所江戸百景愛宕下駄小路	Ⅴ	○	○雪上足跡
40	名所江戸百景深川木場	Ⅴ	○	○雪上足跡
41	名所江戸百景 深川洲崎十万坪	Ⅴ	○	◆近接景＝鳥（鷺）
42	江戸名所御茶の水	Ⅴ	○	○雪上足跡
43	江戸名所四季の隅田川雪中図	Ⅴ	○	○雪上足跡

性を越えて、広重の雪景画の全体的な傾向、技法を探ることが必要と考えたためである。そのような観点から、抽出された29の「要素－効果」の組の傾向を表－1、2にもとづき整理して述べれば次のようになる。

まず、表－2より、43作品中の各要素の出現の状況は木竹が最も多く、全ての画に、大地・人物・建物イ（屋根）はほとんどの画に出現し（重要度10～9）、建物ロ（垂直面）・工作物・降雪イ（空を背景）・水辺イ（水面）は高率で出現する（重要度8～7）。水辺ロ（水上）・降雪ロ（地表・水面等を背景）はおおよそ半数の画に、動物は約3割の画に出現することがわかる。

次に、各効果別にみると、まず、aの白色統合効果を生ずるものの代表は全体に白雪に覆われた屋根（要素－効果の組の略号7a；重要度9、以下の括弧書きも同様に略号と重要度を示す）と大地の表現（4a;6）であるといえ、他に水上の中洲や葦原などにおける白雪の表現（6a;1）があることが知られる。bの統合と無彩色対比の双方の効果を生ずるものの代表は、雪に一部覆われた木竹（3b;7）、灰黒色の空を背景とする降雪の表現（1b;6）であり、大地の積雪にできる灰黒色の影（4b;4）、雪に斑に覆われた工作物の無彩色表現（9b;4）、雪に一部覆われた水上の舟等（6b;3）や建物の壁等垂直面の無彩色表現（8b;2）、さらには雪に覆われた傘の群などの無彩色表現

（2b;1）がある。cの無彩色対比効果を生ずるものとしては、重要度は低いが、灰黒色に表現された建物の壁等垂直面（8c;2）と灰黒色に表現された降雪のない空（12c;1）がある。以上のa、b、cの効果が主体の画は、全体に白・灰・黒の色調が支配し、いわゆるモノトーン調となる。表－1では、作品番号20、21、22等がその代表である。

次にdの統合と有彩色対比の双方の効果を生ずるもの

表－2 構成要素別雪の統合・対比効果集計

要素	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
効果	降降雪大水水建建 工動人	降降雪大水水建建 工動人	降降雪大水水建建 工動人	降降雪大水水建建 工動人	降降雪大水水建建 工動人	降降雪大水水建建 工動人	降降雪大水水建建 工動人	降降雪大水水建建 工動人	降降雪大水水建建 工動人	降降雪大水水建建 工動人	降降雪大水水建建 工動人	降降雪大水水建建 工動人	計
a○ 白色統合効果	0	0	1	2	4	3	7	0	0	0	0	3	69
b○ 無彩色双方効果	26	4	3	2	1	0	1	1	9	1	0	1	51
c● 無彩色統合効果	0	0	2	0	0	0	0	7	2	1	1	3	16
d◇ 有彩色双方効果	2	1	5	8	1	1	4	0	3	1	2	3	63
e◆ 有彩色統合効果	0	0	0	0	2	7	3	0	1	5	2	7	85
f◇ 近接景有彩色双方効果	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
g◆ 近接景有彩色対比効果	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	6	2	10
計	28	19	4	3	4	2	2	3	8	3	6	3	67
表現なし	1	5	2	4	0	1	1	5	2	1	5	7	14
微小（判定難）	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	3	0	6
合計	4	3	4	3	4	3	4	3	4	3	4	3	51

表内数字 上段：出現度数 下段：重要度＝（出現度数÷43）×10（四捨五入）

表-3 広重の雪景画における主要技法体系

としては、重要度は比較的低いが紺色の水面を背景とする降雪(2d;3)、雪に一部覆われた工作物(9d;3)や人物の着物の色(11d;3)、木竹の緑色(3d;2)の表現があり、雪に一部覆われた水上の舟等の色(6d;1)、建物の朱色等(8d;1)、動物の色(10d;1)、同じく雪に一部覆われた花(梅)の色等(12d;1)も見られる。eの有彩色対比効果を生ずるものの代表は、雪中に鮮やかに対比をみせる藍色の水面(5e;6)と雪中の人物の着物の色(11e;5)の表現である。また雪中に鮮やかな対比を見せる建物の朱色(8e;3)、雪晴の空の色(青、赤等)(12e;3)の表現も重要な手法である。その他雪中の動物(10e;2)、水面に浮かぶ鳥(6e;1)などがある。gの近接景による有彩色対比効果を生ずるものは、背景の雪と対比し近く大きく描かれた人物の着物の色(11g;1)である。以上のd、e、gの効果が主体の画は、雪中に色彩の階調をもつもの、あるいは雪白との鮮やかな色彩対比をみせるものとなる。表-1では、作品番号11、15、38等がその代表である。

(2) 雪景画の手法と雪見対象の構成原則

以上に抽出した広重の雪景画における主要構成技法を、総括的にまとめたものが表-3である。各効果が雪の領域と構成要素の組み合わせにより生ずるものと見て、[雪の領域-構成要素]の組で手法を示した。

これらの広重の雪景画の手法は、現代の雪見対象の構成に際しても基本的な原則となるものを示唆していると

考える。すなわち、楽しめる雪景の創出のためには、第一に、雪のあるところとないところをいかに組合わせて風景の全体を構成するか(全雪領域と無雪領域の対比)が重要な視点であり、雪のない広い領域を作り出すものとしては、まず水面が重要な要素であること、その他の重要な要素として、人工的なもので色彩感豊かな近景や色彩感豊かで雪の積らない大きな垂直面、動くため雪の積らないもの等があることである。無雪領域が灰黒色などの無彩色の時には、モノトーン調の対比効果が生まれるが、無彩色と有彩色の区分は固定的ではなく、現実には、光線の状態等によって変換するものもある。例えば、広重の場合、水面は天候に関係なく藍色に表現されるが、現実には天候(空の色)によって異なり、暗い空の下では水面は無彩色に見える

ことは経験から知られる。

無彩色、有彩色いずれの場合でも、この対比効果が生ずるためには、一方に大きな白雪面が確保されていることが必要である。白く単純な全雪領域と無雪領域が互いに引き立て合うことによって雪の風景は印象的なものとなる。以上のことは雪景操作の一般的な原則として、[全雪領域×無雪領域→対比効果]と表現できる。この「関係」として表現された原則は絵では固定的であるが、実際の雪景にあっては、動的なものであり、全雪領域と無雪領域の相互の関係は、雪の降る・積もる・溶ける等の現象により、継時的に生成・変化・消滅していく過程(プロセス)として把握しておくことが求められよう。

第二には、一で述べたマクロな全雪、無雪領域に対し、比較的狭い範囲で雪のあるところとないところ、例えば「斑状」のようなパターンを形成するところ(斑雪領域)をいかにして作り出すかが重要な視点である。この雪のパターンを作り出すための構成要素としては、地上より空中に立ち上がり空間の多い形状を呈するもの(自然界ではそのようなものの代表は樹木である)、凹凸のある垂直面や斜面など雪の積った所と積らない所ができるもの、垂直面や動くものであっても雪の付着しやすい材質のもの、水面を覆うもの・水面上に突出するもの・浮かぶもの、そのものには積るが周囲は水で溶かされる状態等が主要なものと考えられる。この斑雪領域は、小規模

な全雪領域と無雪領域の組合わせとみることができ、本論においては画面全体に対し統合と対比の双方の効果を生むとしたが、このことは、[斑雪領域(=全雪領域×無雪領域)→統合効果+対比効果]と表現できよう。この関係もまた、動的に変化するものであり、積雪が少なくなれば、無雪領域が増大して対比効果が強くなり、積雪が多くなれば、全雪領域が増大して統合効果が強くなるといえる。このほか、類似の効果は、降雪領域において、暗い背景・濃い色の背景との組合わせによって生じ、また雪に覆われた雪面であっても、光条件により陰影(白雪面と暗雪面の組合わせ)ができる状態によっても生ずる。このことは[降雪領域×背景、全雪領域×光条件→統合効果+対比効果]と表現できる。

6. まとめと今後の課題

以上、雪景における統合と対比の効果に着目しておこなった広重の雪景画の分析結果を整理し、29の主要な雪景画の表現手法を抽出し、考察したが、その絵の特質は、雪景における統合と対比の効果をうまく活かし、画面に統一と変化を形成するところにあったといえる。

すなわち、積雪の 大地や物を白く覆い、風景を統一する効果、物を部分的に覆い、風景に統一と変化を与える効果、統一された雪の領域の出現によって、雪に覆われない領域や物との明瞭な対比関係が生ずる効果、および降雪の 背景の暗さや色彩との対比関係により印象的に見える効果等が多用されている傾向が確認された。これらのことは、雪見対象の構成原則を確立していくにあたって、貴重な示唆を与えるものであると考える。

最後に、本論の限界として指摘しておくべき事柄としては、単純化された絵と複雑な現象が伴う実景との差の

ほか、広重の絵には光に照らされる夜の雪の表現が見られなかったこと、絵では積雪の変化していく過程が表現できないこと、全体に小雪の表現が多く、自然現象としての雪の多様な表現に欠けること等の問題がある。これらについて、現代の雪見環境の形成の視点からの検討は今後に残された課題である。

文 献

- 1) 家永三郎(1946): 上代倭絵全史: 高桐書院, 136
- 2) 吉田暎二(1971): 浮世絵事典, 第3巻: 緑園書房, 399
- 3) 小島烏水(1914): 浮世絵と風景画, 小島烏水全集第十三巻: 大修館, 129-148
- 4) 吉村貞司(1986): 中国絵画を読む: 大日本絵画, 108
- 5) 埴生雅章(1989): 雪見の対象となる雪の風景に関する基礎的考察: 造園雑誌53(5), 7-12
- 6) 山口桂三郎, 浅野秀剛(1981): 原色浮世絵大百科事典, 第九巻: 大修館
- 7) 後藤茂樹編(1975): 浮世絵大系11, 広重: 集英社
- 8) 青游社編(1984): 浮世絵八華, 広重: 平凡社
- 9) 植崎宗重(1965): 北斎と広重, 第二巻, 東海道五十三次: 講談社
- 10) 植崎宗重(1965): 北斎と広重, 第三巻, 木曾街道六十九次: 講談社
- 11) 植崎宗重(1965): 北斎と広重, 第四巻, 隅田川: 講談社
- 12) 植崎宗重(1965): 北斎と広重, 第五巻, 江戸百景: 講談社
- 13) 鈴木重三監修(1975): 広重: 講談社

Summary : As one of the fundamental study about the method of shaping the environment suitable for snow-watching, the effects of snow-scape in HIROSHIGE's Ukiyoe were reserched as follows:

1. 43 HIROSHIGE's snow-scape were selected for the analysis in this reserch.
2. The effects of "Contrast" by the uniformity and variety in snow-scape were produced by the arrangement of 4 snow-area; "Snow-covered-area", "Non-snow-area", "Snow-spots-area" and "Snow-falling-area".
3. The important elements that produce the effects are snowfall, trees and bamboos, water-surface, objects on the water, building and structure, animals, man, sky and so on.
4. The 29 methods of HIROSHIGE's snow-scape presentation were shown as the combination with the snow-area and these elements.

As a result, these effects indicate the principle of composing the objects for snow-watching.